岐阜協立大学論集 56 巻 2 号（2023 年）
The Journal of Gifu Kyoritsu University, Vol.56, No.2（2023）

ドラマにみる女性の「指示・命令」表現

―言語資源化と話し手像の観点から―

横倉　真弥（岐阜協立大学経営学部）

キーワード：言語資源　役割語　定型表現　命令形　語用論的意味

１．はじめに

行為としての「指示・命令」は、職場、家庭、教育機関・現場、友人同士など、日常のあらゆる場面で行われる。しかしながら、これを表す表現として「～シロ」のような「命令形」が用いられることは、それほど多いわけではない。多くの場合、相手や場への配慮を表すために、発話内効力の調整を行い、相手への心理的負担を軽減するような「～シテクレナイカ（依頼）」「～シテホシイ（希望表明）」などを用いている。このように「指示・命令」表現といっても、発話内効力に応じた様々なバリエーションがあり、実際に使われているのである。

横倉（2022）では、職場の例をとり上げて、男性は組織の中で”上司“としての「言葉遣い」を意識的であるか無意識的であるかを問わず、いわば伝統的に継承し、そのような「言葉遣い」をすることで「指示・命令」に伴う困難さを和らげる方法を身につけてきたため、ワンパターンな表現を選ぶ傾向にあるのに対し、女性は職場の中で「指示・命令」する経験やロールモデルが少ないこともあり、多様な言語形式を選ぶ傾向にあることを指摘した。そして、調査対象のおよそ 3 割の女性が、一般的に女性が使用するとは考えられない表現、例えば「明日までにこの資料が必要なので、今日中に仕上げてくれるかい？」等の回答をしているのに注目した（横倉　同上）。女性の場合、「指示・命令」の使用経験の差がイメージとしての女性上司の「言葉遣い」に反映しにくい状況があり、それが言語資源の性差として表れているのである。

このイメージとしての「言葉遣い」は、いわゆるステレオタイプなどと結びついて批判を受けることもあるが、ある言葉遣いが言語資源として人々の間に定着しているかどうかを示すものでもある。現時点では、職場など公的領域において上位者としての女性の「指示・命令」表現は、まだ多くの人々の共通するイメージ、すなわち言語資源として定着しているとは言い難く、そのため実際の社会でも女性たちが上位者の立場に立った場合の、効果的な言葉遣い（を含めた振る舞い）を模索しているといえよう。

そこで本稿では、女性が職場において上位者として「指示・命令」を下す場合に使用される表現が言語資源化する過程に着目し、女性がどのような「指示・命令」表現を使用しているのか、そしてその使用が話し手の人物像と結びついてどのような印象・効果をもたらすのかについて、ドラマの脚本を対象に解明することを目的とする。本稿で、ドラマの脚本を素材にしたのは、ドラマは間接的とはいえ、「指示・命令」する立場にある女性の「言葉遣い」のイメージを言語資源に加えるからである。そして、このような間接的な言語使用経験は自然会話分析の際にも、一つの用法参照例としての意味も持つと考えるからである。

2. 分析の視点

2.1　定型表現化された役割語

女性上司（上位者）の「指示・命令」表現を脚本から抽出し、考察する場合、「女性らしさ」や「上司（課長や部長など）らしさ」に着目して、その人物の「らしさ」を表す語彙や用法を対象にすることが、まず念頭に浮かぶだろう。

金水（2003）によれば、ある特定の言葉遣いを聞くと特定の人物像を思い浮かべることができるような時、その言葉遣いを「役割語」という。例えば「よろしくてよ」のような言葉遣いからは、お嬢様、奥様といった裕福な女性を思い浮かべる時、「てよ」などの言葉は、そのような女性の「役割語」ということになる。このような言葉遣いは、漫画やアニメ、ドラマなどの登場人物の特徴をより引き立たせる役割を担っているが、実際に使われることは少ないとされる。

しかしながら、本稿でいう「役割語」とはこうした「キャラ立ち」、すなわち上司「らしさ」をシンボリックに示す「役割語」ではなく、上司の立場で使う定型化された言語表現である。話し手（上司）と聞き手（部下）は、その表現や語彙を繰り返し使うことで語用論的意味を定着させ（大谷・中山　2020）、上司の「役割語」となる。定型表現がこうした機能を持つため、その用法や構文が言語資源として蓄積されて様々な場面での言語使用の対応を可能にさせることになるのである。本稿では、こうした内容を持つ上司の定型表現としての「役割語」を、取り上げることにする。

2.2　「指示・命令」の語用論的意味を成立させる条件

先に述べたように、指示・命令は直接「命令形」を用いて表現されることは少なく、聞き手への配慮から依頼などの表現を用いて行われることが多い。言語上の配慮を表す一般的な法則では、「聞き手の負担を減らす」方向での発話内効力の調整がなされる（リーチ　1987）。また、日本語の特徴として、発話によって促される行為を通じて、話し手が聞き手から「恩」を受けるように表現することで、聞き手を上位に位置づけるという配慮の表現方法が一般的である（横倉　2012）。この二つの特徴を考慮すれば、日本語においては、「特別な権限や地位」が話し手になく、発話によって促される行為を実行するのは話し手で、その行為をするかどうかを決定するのは聞き手であり、発話によって促される行為による利益を話し手が得るような構造に近づけた表現を使用することが一般的に丁寧ということになる。そして、こうした方向で、話者の立場や場面に応じて発話内効力が調整される傾向にあるといえる。「指示・命令」の語用論的条件を基準にして、配慮のためになされる発話内効力の調整のあり方（本稿で扱った表現のみ）を表１に記したが、例えば陳述という発話内行為は行為者や決定者という概念を表さず、他者への働きかけを行わない表現であるという意味で、他の発話内行為とは異なり、それだけ発話内効力は弱くなる。

そこで本稿では、「指示・命令」を字義通りに表す命令形だけでなく、「指示・命令」の語用論的条件が整っているときに使用される表現をすべて「指示・命令」表現として扱うことにしたい。リーチ（2020）は言葉と意味の二項関係で成り立つ意味（「意味論的意味」すなわち、字義通りの意味）から、言葉と話し手と意味の三項関係で成り立つ意味（語用論的意味）を区別しており、本稿ではそれに従い、「指示・命令」の語用論的意味を持つ表現全てを抽出する。もちろん、そのためには、話し手が「指示・命令」を行う語用論的条件が必要である。改めてその条件を示せば、表１のように「指示・命令」を下すための特別な権限や地位、その行為を行うかどうかの決定権は「話し手」にあり、その「指示・命令」によってすべき行為を行うのは「聞き手」であり、その行為の受益者は「話し手/聞き手/どちらでもない」ということになる。したがって、この語用論的条件を満たせば、「～シロ」という命令形から「～スルコトニナッテイル（陳述）」ま

で、様々な表現が「指示・命令」の語用論的意味を表す表現となりうる。これらの表現と、話し手の置かれた場面との関係を考察することで、女性の「指示・命令」表現の特徴が浮かび上がると考える。

ただ、本稿の分析対象となるドラマにおける「指示・命令」表現の効果について考慮しなければならない点は、登場人物の特徴を引き立たせるために、ある表現を使用させる場合、金水のいう「役割語」のような効果を期待していることが往々にしてある点である。したがって、そのような誇大化された効果も含めて、女性の「指示・命令」表現の人々に与える印象・効果を検討する必要があるだろう。また、「指示・命令」表現のうち「命令形」については、「指示・命令」の語用論的条件が整っていない場合でも取り上げ、どのような場面で用いられているのかを考察することで、字義通りの「指示・命令」表現が使用された場合の印象や効果も考えることにしたい。

表１　発話内行為を成立させる語用論的条件と発話内効力

語用論的条件 ＼ 発話内行為（表現例）	特別な権限や地位	行為者	決定者	受益者
指示・命令（例：～シロ、シナサイ）	話し手	聞き手	話し手	話し手/聞き手/どちらでもない
依頼（例：～シテクレナイカ、～オネガイ）	特になし	聞き手	聞き手	話し手
勧誘・提案（例：～シヨウカ、～シテハドウカ）	特になし	聞き手/両者	聞き手	話し手/聞き手/両者
全般（例：～シテ）	特になし	聞き手	― ― ―	― ― ―
陳述（例：～スルコトニナッテイル）	特になし	― ― ―	― ― ―	話し手/聞き手/どちらでもない

強め

弱め

注）川口・蒲谷・坂本（1998）をもとに、横倉が加筆し作成した。この表では話し手と聞き手の二者間の構造を表す。

3. キャリア女性の「指示・命令」表現　―『緊急取調室』―

本節では、2019 年 4 月 11 日に放送された「緊急取調室」第 1 話の脚本を取り上げることにしたい。この回は、警視庁初の女性参事官が立てこもり犯を射殺したという真相を、緊急事案対応取調班のメンバーが明らかにしていくというストーリーである。ここでは、この警視庁初の女性参事官の「指示・命令」表現を中心に、その他の登場人物のそれと比較しながら分析していくことにする。

3.1　同じ言語表現が話し手と聞き手との関係性の違いで複数の語用論的意味を持つ例

裁判員裁判の対象事件について録音・録画が義務づけられ、その手本を都内各警察署幹部たちに見せるはずの場面で、あろうことか取調べにあたった女性刑事が被疑者の態度にたまらず（実は意図して）椅子を蹴ってつめ寄るという行動にでる。その後、この女性刑事は刑事部長に呼ばれるが、そこでこの場面を見ていた女性参事官が部長に次のように言う。

女性参事官（注：脚本では登場人物名が書かれているが、便宜上ここでは役職名で記す。以下同じ。）
「部長、このような化石を法改正後の手本となるべきキントリに置いておくのは問題では？（p. 52)」

そしてその後、この女性参事官は再び部長に対して「真壁（女性刑事のこと：筆者注）には、しばらく取調べを控えさせてはどうでしょう？（p. 53)」と言う。

この女性参事官の発話内行為は、話し手の女性参事官から見て上司である部長に対しては、女性刑事の処分についての「提案」である。しかし、その一方で部下である女性刑事に対しては暗黙の裡に「指示・命令」を意味する。だからこそ、この女性刑事は「ちょっと待ってください。(p. 52)」と言うことになる。この例は、話し手と聞き手の関係性、すなわち、語用論的条件の違いによって、同一の発話が一方へは「提案」、他方へは「指示・命令」になるという、語用論的意味の違いを鮮やかに示しているだろう。

しかも、この「指示・命令」表現は、「質問」「提案」の形をとることで、その実行（正式の「指示・命令」）を権限のある「部長」に委ね、話し手である女性参事官は関与しない形をとる。すなわち言語形式上は、自分の「分」を超えた「指示・命令」ではないというスタイルをとるものであり、女性に限らず、エリート官僚が使用しそうな表現としても使われているものである。

3.2　女性上司と男性上司との「命令形」使用の違い

次に、女性上司と男性上司とでは、部下（下位者）に対する「指示・命令」でも、その表現にどのような違いが見られるかという点について、脚本からその表現を抽出して見てみてよう。

女性参事官が人質立てこもり犯を射殺した件で、その真相に迫ろうとする女性刑事に対して、直属の上司である取調班・管理官（男性）は次のように言う。

取調班・管理官「真壁、やめておけ！（p. 65)」

そして、その真相が、女性参事官による意図的な射殺であることが濃厚になると、その取調班の管理官に対して、刑事部長は以下のように言う。

刑事部長　「いや、いやいやいやいや絶対に立件しろ。(p. 70)」

この命令形「～シロ」についで、発話内効力の強さを示す表現は、「スル」の尊敬語「ナサル」を命令形に組み込んだ「～シナサイ」がある（「～シナサイ」の成り立ちについては、後に詳しく記述する)。この表現は刑事部長が真相を暴こうとする女性刑事に対して、「そこまでにしなさい（p. 65)」とか、副総監（男性）が女性参事官に対して「ほとぼりが冷めるまで公の席は控えなさい。(p69)」や、刑事部長に対して「マスコミの方は君が責任をもって抑えなさい（p. 59)」で使用されている。

これに対して、女性参事官は基本の命令形「～シロ」を使用しない。その代わり、例えば、自分が現場に潜入し、代わりに人質になることを犯人に告げると、そのことに困惑する下位者に対して次のように言う。

女性参事官「現況から判断して誰の指揮に従うべきかしら？（p. 56)」（質問）

また、現場のSIT隊員に対しては、以下のように「て形止め」を使用している。

女性参事官　「拳銃を貸して（p. 56）」「待機して。（p. 56）」（て形止め）

「て形止め」は働きかける表現であることは示しているが、その発話内効力を特定していない。また、「～テ」で終わっていることから、敬体の使用も外れることになる。しかしながら、この「て形止め」の使用は、敬体使用が必ずしも必要でない間柄において、男性が「～シロ」と敬体なしの命令形を使用しているのと、ある意味で同格ともいえる。すなわち、「て形止め」は発話内効力を特定していないために、語用論的条件が示す意味を直接反映させることもできるのである。したがって、女性は同様の条件で「～シロ」を使わない代わりに、「て形止め」を使用していると考えられる。こうした「質問」や「て形止め」などの表現が下位者にも「指示・命令」として理解されていることは、脚本のト書きで「対策官、やれやれといった表情で頷く。渋々ホルダーから拳銃を抜いて玲子（筆者注：女性参事官のこと）に渡す（p. 56）」のように記されていることからもわかる。

一方、「～シナサイ」は脚本中では、女性参事官が立てこもり犯の射殺を自供した後に、女性刑事に対して、「私を逮捕しなさい。罪状は『殺人』です（p. 75）」のように使用されている。この「～シナサイ」という命令形の使用について、すでに殺人を自供した時点で参事官の地位はなくなっているとすれば、「指示・命令」の語用論的条件は成立しないので、「指示・命令」以外の意図とも解釈可能である。しかし、またそれにもかかわらず、このセリフは女性参事官の参事官としての誇り高い最後の「指示・命令」という思いを表しているとも解釈できよう。

そして、語用論的条件の有無との関連でいえば、13 年前に夫を亡くして沈んでいる女性刑事のもとに、女性参事官が現れて、「あなたも警視庁に入ったなら、上をめざしなさい。権限を手に入れなさい。（p. 67）」というセリフもあげることができる。当時の職位は参事官ではないものの、上位者の立場での発話であるが、その他の語用論的条件からいえば内容がプライベートな事柄であり、女性刑事には発話によって促される行為を行うかどうかを決定する権利があり、「指示・命令」の語用論的条件は成立しない。したがって、この場合の語用論的意味は「助言」や「励まし」に該当し、なんらかのシンパシーが働いているとみられる。すなわち、男性上司と異なり、女性参事官が「～シナサイ」という字義通りの命令形を使用する場合は、職務上の「指示・命令」場面ではなく、なんらかの感情表出がなされる場面であるといえよう。

4. 企業における女子社員の「指示・命令」表現　－『わたし、定時で帰ります。』－

次に分析の対象とするのは、2019 年 4 月 16 日に放送された『わたし、定時で帰ります。』の第 1 話の脚本である。この回では、Ｗｅｂ制作会社に勤める東山結衣（主人公）や三谷佳奈子（主人公の同僚）が教育係として新人の指導をする場面が描かれている。三谷佳奈子は始業 30 分前には出社し、残業もいとわずがむしゃらに仕事をする人物という描かれ方で、彼女の指導法に反発した新人が佳奈子のパソコンのパスワードを変えて開けなくしたうえで、会社を辞めてしまうという騒動を引き起こす。ここでは、佳奈子の「指示・命令」表現を中心に、同じ教育係として任命された東山結衣、そして部長（男性）の「指示・命令」表現との比較を通じて分析を進めていく。

4.1　多様な「指示・命令」表現

佳奈子が新人の咲を指導した際、すなわち「指示・命令」の語用論的条件が整っている時に使用した表現は以下のとおりである。

（何時まで仕事をやればよいのか、という咲の質問に対して）
① 「終わるまでやりましょう。頑張りましょう（p. 18）」（勧誘・提案）

（遅刻はしていないが、佳奈子の基準では来社が遅い咲に対して説教をする場面で）
② 「新人というものはね、始業 30 分前には会社に来るものですよ？（p. 18）」（確認）
③ 「まだ右も左もわからないんですから、常に職場にいて先輩方の下働きをする。（p. 18）」（陳述）
④ 「なんでしょうか、その爪。そんなにきれいに手入れする暇があったら、一分でも早く会社に来て下さい（p. 18）」（命令形 ～テクダサイ）

（咲の雑な仕事ぶりに対して）
⑤ 「こういう場合は縮小コピーしてファイルしましょう（p. 22）」（勧誘・提案）
⑥ 「見る人のことを考えて、相手の立場に立って考えるのが仕事の基本です（p. 22）」（陳述）

佳奈子の「指示・命令」表現は①⑤にみられるような勧誘・提案型、②③⑥のような確認型、陳述型が多く、基本的にはこの 2 つを使って「指示・命令」を表現している。丁寧とはいえ、④のような命令形を使うのは、「なんでしょうか、その爪。そんなにきれいに手入れする暇があったら」と言うように、相手を非難する感情が高ぶった時である。

佳奈子と同期で同じく新人の教育係を任されている結衣の「指示・命令」表現は、次の通りである。

（パソコン画面を見ながら、来栖（結衣が担当する新人）に仕事を割り振って）
⑦ 「これ、お願い（p. 13）」（依頼・遂行動詞）

（佳奈子を非難する来栖をたしなめて）
⑧ 「ちょっと黙ろうか(p. 24)」（勧誘・提案）
⑨ 「なんの結果も出していない来栖くんが言うことじゃないよね(p. 24)」（確認）

佳奈子の指示・命令がなされた文脈が、新人の仕事ぶりへの苦言というのに対し、結衣の場合、仕事の割り振りという文脈のため、⑦では「これ、お願い」とシンプルに依頼の遂行動詞を使用している。しかしながら、出過ぎた新人をたしなめるような文脈では、⑧⑨のように佳奈子同様、勧誘・提案型や確認型が用いられている。

また佳奈子の上司である男性部長の「指示・命令」表現は、次のようになる。

（佳奈子が担当する新人（咲）から教育係の変更願いが出されたのを受けて）
⑩ 「来週のコンペ終わったら、東山さん、小泉さん（筆者注：咲のこと）の担当に代わってくれる？(p. 21)」（依頼）
⑪ 「来栖くんは三谷さん（筆者注：佳奈子のこと）が面倒見て。チェンジで(p. 21)」（て形止め・言い差し）
⑫ 「今日から東山さんも小泉さんのフォローしてあげて(p. 21)」（て形止め）

（咲が佳奈子のパソコンのパスワードを変えて会社を辞めてしまい、大切な資料が入っているパソコンが

開けなくなって困っている状況で、佳奈子に対して）
⑬　「まずは小泉さん、説得してみよう？(p. 23)」（勧誘・提案）
⑭　「三谷さんが（筆者注：咲に）頭下げに行くっていうのはどうかな(p. 23)」（提案）

⑩⑪⑫は仕事の割り振りの文脈と考えられ、ここでは⑩「依頼」、⑪「言い差し」、⑪⑫「て形止め」の言語形式が用いられている。仕事の割り振りという文脈で、依頼表現が出てくるのは結衣と同じである。また、「言い差し」「て形止め」も多用されており、字義通りの命令形は用いられていない。これは、聞き手に対する配慮の表れといえ、「指示・命令」表現使用の一般的な傾向を踏襲している。

また、大事な資料が入ったパソコンを開くため、佳奈子を咲のところへ謝りに行かせることを「指示・命令」する場面では、⑬⑭のような勧誘・提案型を使用している。⑬の勧誘・提案型は、佳奈子がそれを遂行することによって、その利益（すなわち、ここではパソコンが開けるようになること）が佳奈子、そして部長や同僚全員にあることを、暗に指している。そのうえで、佳奈子に頭を下げに行かせる提案をする形になるので、「みんなのために、お前が頭を下げてなんとかしろ」という意味になるだろう。このセリフの直前に、副部長が管理部にパスワードを解除してもらうよう提案しているが、部長は「これ以上みっともないとこ見せられないよ。」と却下している。いわば、自分のメンツや利益を守るために、佳奈子にいやな役回りを押し付ける格好である。以上の経緯を考えれば、佳奈子にとっては非常に負荷の高い「指示・命令」内容となるが、部長はそれを遂行するにあたって字義通りの「命令形」を使うことを避けて、いわば佳奈子に配慮して表現している。しかしながら、勧誘・提案型の表現で「指示・命令」をしても、佳奈子は「…私のせいでしょうか（p. 23）」と精一杯の抵抗を示して、咲に頭を下げに行くことはしなかった。すなわち、部長の「指示・命令」は結果としては失敗したことになるが、この失敗は語用論的意味の不成立によるものではない。部長の発話を「指示・命令」として佳奈子も捉えているが、承服できなかったのである。

このドラマの中では、佳奈子も結衣も部長も、聞き手にとって負荷の高い、あるいは言われたくないことを「指示・命令」する場面では、共通して勧誘・提案型の表現が使用されている点が指摘できる。

4.2　字義通りの命令形

これまで見てきたように、指導に際して自分の権限をことさら強調するような命令形の使用は避けていた佳奈子だが、咲に対して1回だけ、「～シナサイ」を使う場面がある。それは、咲の仕事ぶりに対して細かい指導をしたが、それをよしとしない咲に対して、「私の言うことが聞けないなら好きにしなさい。(p. 23)」と言う場面である。「～シナサイ」と命令形を使用しているが、これには「好きにする」ことを命令する意図はなく、「この先どうなっても知りませんよ。(p. 23)」と続くセリフが表すように、「もう知らない！」という怒りの表出表現であろう。先に見た『緊急取調室』でも、「～シナサイ」はシンパシーや怒りの表出として使用されていた。

また、「～シテクダサイ」も「～シナサイ」に授受形式「テクダサル」を組み込んだ形になるので、授受形式が入っている分、効力は依頼よりになるが、言語形式としては「命令形」である。この「～シテクダサイ」も佳奈子の場合、「なんでしょうか、その爪。そんなにきれいに手入れする暇があったら、一分でも早く会社に来て下さい(p. 18)」と言うように、相手を非難する感情が高ぶった時に使用している。

部長も依頼よりとはいえ字義通りの「指示・命令」表現を使用するのは、パソコンが開けない大変な事態が発生し、しかも新人が二人も会社をやめた状況で、佳奈子と共に教育係の結衣に対して、「というわけで、東山さんも責任持ってやって下さい！(p. 23)」と、いささか悲鳴気味に言う時である。

両者ともに「指示・命令」の語用論的条件は整っているが、職務上の「指示・命令」の意味以外に、なん

らかの感情表出の意味合いが加味されているといえる。

5. 水商売の女性たちの「指示・命令」表現　－『その女、ジルバ』－

これまで、男性が多い警察組織、比較的バランスのとれた男女比率の企業で働く女性の「指示・命令」表現を見てきた。これらの組織で働く人々は、私的な部分と組織で働く公（仕事）の部分の区別がはっきりしており、この公の場面では、敬体は下位者が上位者に使うだけでなく、特に職場の全員を集めて話すときには上位者も下位者に対して使われている。次に、これとは対照的に、女性が多く、私的な感情が仕事に影響しやすい職種である水商売に従事している女性の「指示・命令」表現を見ていくことにする。分析対象は、2021 年 1 月 9 日、1 月 16 日放送の『その女、ジルバ』第 1 話・第 2 話の脚本である。

この回は、アパレル会社に勤めていたが、リストラ候補要因として物流センターの倉庫へ出向させられ、独身で金銭的な余裕もなく、身なりにもかまうことがなくなったまま、40 の誕生日を迎えた新（あらた）が、ひょんなことから 60 歳以上のホステスが集まるクラブで働くことになる場面が描かれている。先輩ホステスたちは 60 歳以上、ママのきら子は 80 歳以上という設定で、新と他の女性達には親子ほどの年齢差がある職場である。

5.1　敬体不使用

主人公の新に対する、きら子と先輩ホステス達の「指示・命令」表現を抜き出してみよう。

（お試し採用が決まった新にホステスらしい服装をさせる際に）

①　ナマコ（推定 60 代）「さあ。このズタ袋をお脱ぎ！(p. 97)」（命令形　オ～連用形）

②　ひなぎく（推定 70 代）「お下履きもよ(p. 98)」（名詞＋ヨ）

（新にホステスの仕事の心得を指導する際に）

③　エリー（推定 60 代）「グラスが空かないように気をつけて。(p. 99)」（て形止め）

（ショーを始めるための準備をする際に）

④　ナマコ「アララ（新の源氏名：筆者注）！ステージに椅子並べて！(p. 101)」（て形止め）

⑤　ひなぎく「横一列よ(p. 101)」（名詞＋ヨ）

（きら子がお客に出す突出しの料理作りを新に教えている場面で）

⑥　きら子「家でも誰か、そうね…好きな相手に食べさせるつもりでお作りなさい。(p. 109)」（命令形　オ～シナサイ）

（料理の腕が上がっても食べるのは自分ひとり、と言う新に対して）

⑦　きら子「もったいない！その体お貸し！(p. 110）」（命令形　オ～連用形）

これら①～⑤のセリフは、先輩ホステスが見習いの新に、仕事の指導をする文脈で用いられており、「指示・命令」が成立する語用論的条件が整っているといえる。先輩ホステスたちと新はこの日が初対面であり、互いによく知らない者同士であるが、敬体の使用はない。そして、それを反映しているのが③④の「て

形止め」、②⑤の「名詞＋ヨ」などの表現である。「て形止め」は、敬体使用が必要でない関係で、「～シロ」の代わりに使用されている可能性があることを先に指摘したが、それと同様のことを表せるのが「名詞＋ヨ」といえよう。また、「指示・命令」とは異なるが、先輩ホステスたちは「誕生日にあの格好でバイト探し？(p. 102)」など言いにくいこともずけずけと言ったり、自分の衣装に入らない新に対し「水分が多いのは若い証拠よ(p. 98)」などとからかったりする。これは、先輩ホステス達が自らの上位性を顕示しているというよりも、先輩ホステスたちの気さくさや、親しみやすさを表しているといえるだろう。先輩ホステス同士やママのきら子とのやりとりも基本的には敬体は使用されない。彼女たちはお互いの事情を知ったうえで、何十年と共に仕事をしてきた、ある意味で家族以上の存在であり、そこに新しいメンバーが加わったことを表していると捉えることができよう。

しかしながら、彼女たちが初対面の新に対して、敬体抜きで言いにくいこともずけずけ言うことを可能にしているのは、何も彼女達の気さくな性格だけに起因しているのではない。それは先輩ホステス達と新との親子ほどもある、いわば圧倒的な年齢差ゆえであるともいえる。日本では下位者が上位者に対して敬語を使用する一方で、上位者は下位者に対して敬体を使用する必要は必ずしもないという言語上の慣習が健在であり、この慣習はすでに見た通り職場でも生きている。そして、上位・下位の関係は単に職位に限定されず、年齢差をも含むのであり、この場面ではそうした年齢差が生きているといえるだろう。

5.2　“女性らしい”「命令形」　－　女言葉　－

このドラマの中で特徴的な「指示・命令」表現が、「オ～シナサイ」「オ～連用形」の形である。この表現は前項にあげたナマコのセリフ①「さあ、このズタ袋をお脱ぎ！」、きら子の⑥「お作りなさい」⑦「その体お貸し！」に見られるような表現を指す。

「～シナサイ」は「スル」の尊敬語「ナサル」に聞き手敬語の「マス」がついた「ナサリマス」の命令形、「ナサリマセ」が原型である [1)]。さらにこれが音便化し「ナサリマセ」が「ナサイマセ」となり、「マセ」が省略され、「～シナサイ（連用形）」となる。そして、この表現に、「お/ご」が付くことで敬意（丁寧さ）は増すものの、命令形由来の表現であるので、命令形の持つ「強さ」を聞き手に感じさせる表現である。この「オ～シナサイ」から、さらに「ナサイ」を省略し、連用形で終わらせているのが「オ～連用形」という命令表現になる。この「オ～連用形」「オ～シナサイ」はいわば、命令する相手に対して丁寧さも感じさせながらも、命令を明示するという表現である。すなわち、きら子たちは、「指示・命令」を下すために、字義通りの「命令形」を使用しているのである。

きら子や先輩ホステスたちは「です・ます」などの敬体は使わないものの、けして乱暴な話し方をしているわけではなく、②「お下履き」のように、いわゆる美化語、丁寧語の類は非常によく使う。この美化語・丁寧語、「オ～連用形」「オ～シナサイ」の多用傾向は、いわゆる「女言葉」を印象付ける。特に「オ～連用形」の形の命令形は、男性が使用することは想像しにくい。それゆえ、「女」をシンボリックに感じさせる「役割語」として、きら子や先輩ホステスたちに使用させることで、日常的に「女」という虚構を演じる職業に従事している女性のキャラを引き立たせる効果を狙っているともいえる。同時にまた、その多用は現在では話し手が一定の年齢以上の女性であることを連想させるだろう。

『わたし、定時で帰ります。』の中で、佳奈子が「私の言うことが聞けないならば、好きにしなさい。(p. 23)」と言ったり、また、『緊急取調室』で女性参事官が「私を逮捕しなさい(p. 75)」と言ったりするが、同じ状況で「好きにおし！」「わたしを逮捕おし！」と言えば、聞き手も周囲にいる人間も違和感を持っただろう。（「お好きになさい」「逮捕なさい」ならば許容度は上がりそうである）企業で働く若い女性（佳奈子の設定年齢は 32 歳）の言葉遣いとも、警察組織という官僚組織のエリート女性の言葉遣いとも異なる、どこか

古風で粋な女性たちをキャラ立てる「役割語」である。

また、⑨の「その体お貸し！」は、せっかく若い体を持つのにもかかわらず、恋人もいない新に対して言ったセリフであり、これは指示・命令の語用論的条件は成立しておらず、冗談の類、あるいは発破がけを意図したものであろう。先輩ホステスやきら子たちの新に対するセリフの特徴は、指示・命令の語用論的条件が整っているところでも、上記のような「女言葉」系の命令形を使う頻度が他のドラマよりも高いだけでなく、指示・命令の語用論的条件が整わない場面でも命令形の使用がかなり見られるということである。すなわち「命令形」が生き生きと、様々な文脈で用いられているのである。

5.3　女性上司の「～シロ」使用

新が昼間勤務している職場は、以上のバーとは対照的な職場である。この勤務先の物流センターの倉庫は新やその同僚のようなリストラ候補として出向させられている従業員、パート中年女性・アルバイト青年労働者などから構成されており、主な仕事は荷物の持ち運びという肉体労働である。出向組の新はここを「姥捨(p. 107)」「追い出し部屋（p. 107)」と呼んでいる。

この職場のチームリーダーの女性上司（設定では39歳で新とほぼ同年齢）は、職場の部下全員を対象とした時には「終業です！昼シフトの皆さん、あがってください（p. 107)」と敬体を使用している。この女性上司が内密のリストラ候補リストを見て、新に「スケバンのごとく（筆者注：ト書き）(p. 123)」、「ドスの聞いた声で（筆者注：「ト書き」）(p. 123)」「笛吹さん…。ちょっといいかな」「話があるんだけど」「ちょうどいい。課長も来てください。ナシつけましょう（p. 123)」と言う。しかし嫌がる課長、そして新と同じく出向組のもう一人の女性に向って、「いいから来いよっ！課長！笛吹新！以下同文！（p. 123)」と言う。この女性上司は「不愛想で意固地、人から誤解されやすい性格（東海テレビ HP より)」であり、そういった性格を反映させた言葉遣いともいえる。したがって、この「命令形」の使用は「スケバンのごとく」といったト書きにあるような女性上司の人物像と緊張する気持ちの高ぶりとが合わさっているとみてよいだろう。いずれにせよ、特異な人物像で、現実的には一般女性には使いづらい表現といえる。

6. 母親の「～シナサイ」の二面性　－『妻、小学生になる。』－

これまでは、職場における女性の「指示・命令」表現を見てきたが、この節では、家庭という私的な領域での母親の「指示・命令」表現を取り上げていきたい。分析対象は、2022年1月21日、28日、2月4日放送の『妻、小学生になる。』の第1話・第2・第3話の脚本である。この回は、自分の意見をしっかりと持ち、一家の中心として頼もしい存在だった母親の貴恵が交通事故で亡くなり、10年後、生まれ変わって小学生の万理華の姿となって、元夫と元娘のところへやってくるという話である。自分が貴恵の生まれ変わりであることを簡単には信じてもらえない万理華だが、万理華が話す家族と共有する思い出やその話し方などから、次第に信じてもらえるようになる。

貴恵＝万理華の話す「指示・命令」表現を抜き出してみよう。

（家族で家庭菜園に来て、収穫を始めるにあたって）
①貴恵「秋の収穫祭、始めっ。(p. 15)」（名詞止）
②貴恵「パパは雑草抜いてあとは肥料やり！(p. 15)」（名詞止）

（貴恵が亡くなって、10年後、生まれ変わりの万理華が突然現れ、圭介（元夫）と麻衣（元娘）の家に上

がり込んで）
③万理華「話あるから、下に集合！（p. 19）」（名詞止）
④万理華「忙しくても、買ってきたお惣菜だけになっても、それだけは守りなさい(p. 20)」（命令形　～シナサイ）」

（貴恵が亡くなった後、圭介がなげやりに生きてきたことを知って、万理華が説教をして）
⑤万理華「今日も一日、しっかり頑張んなさいよ！(p. 31)」（命令形　～シナサイ＋ヨ」
⑥万理華「あなたの怠慢、麻衣の人生を道連れにしないで(p. 34)」（て形止め）
⑦万理華「勿体無い生き方しないで、しっかり、生きなさい(p. 34)」（命令形　～シナサイ）

（生まれ変わって小学生となった万理華が友利（元弟）に会いに行き、友利の相変わらずだらけた暮らしぶりに腹を立て）
⑧万理華「そんなこと調べてる暇があったら、バイトの一つでもしなさいよ(p. 57)」（命令形　～シナサイ＋ヨ）

上記のように、貴恵＝万理華の表現には「～シナサイ」という字義通りの命令形が多い。また、家族間での発話であるため、敬体使用がなく、それゆえ「て形止め」「名詞止」が多用されているが、「～シロ」の使用はない。上記の発話の中では、とりわけ、貴恵＝万理華が元夫である圭介に対していうセリフは、どんなセリフも「指示・命令」であるかのような効力を、少なくとも両者の間では持っているようである。それは、貴恵が「家に着いたら、全身マッサージコース、60 分（p. 16）」というのに対し、圭介は「かしこまりました、ご主人様(p. 16)」と応じていることからもわかる。圭介は貴恵についていくことを当然としているという人物設定である。⑤⑥⑦などは「指示・命令」というよりも「助言」「発破掛け」のような語用論的意味になるだろうが、第３者からは「指示・命令」の語用論的条件が成立していないと思われるような場面でも、圭介と万理華（＝貴恵）の間では成立している可能性もあり、「～シナサイ」という字義通りの命令形を用いている可能性もある。

貴恵のように「命令形」を多用する人は、一般的に絶対的な支配者のような印象を与えるが、命令に従うことが安心感の源であるように聞き手に感じさせることができれば、聞き手にとっては絶対的な信頼のもと、作品中で貴恵の弟の友利が言うように「トップオブ、頼り甲斐（p. 64）」のある人物になるだろう。実際、貴恵はこの「トップオブ、頼り甲斐」のある人物として描かれており、命令形の多用はその人物像を引き立たせる「役割語」としての効果を果たしているといえる。もともと頼り甲斐のある人物であった貴恵は、結婚し子供を持ってからは、さらにその頼り甲斐をパワーアップさせ、家族の中で絶対的な存在となる。つまり、頼り甲斐のある母親になることで、家庭における「指示・命令」する力をさらに強めて、「～シナサイ」を多用できる存在になるのである。

こうした母親の、特に子どもに対するあからさまな「指示・命令」は、職場という公の場において「指示・命令」がなされる場合、「指示・命令」できる立場や権限を隠すかのように「命令形」の使用を避け、他の表現を用いる工夫がなされているのとは、好対照である。

7. 女性上司の「～シナサイ」の対照的な効果　－『ハケンの品格』－

『妻、小学生になる。』では母親の家庭での命令形が表す「有無を言わせない支配・威圧」と「頼り甲斐」

の二面性を描いているが、本稿では女性が職場でこの命令形、特に「～シナサイ」を使用した時の効果の二面性についてみてみよう。分析対象とするのは、2020年6月17日放送の『ハケンの品格』、第1話の脚本である。

ここでは主人公のスーパーハケンが同じ職場に配属された年下の派遣社員の女性二人に「無駄口叩かないで仕事しなさい(p. 80)」「さっさと仕事に戻りなさい(p. 81)」「電話を切る時は切れたかどうかちゃんと確認しなさい！(p. 90)」などのセリフが目立つ。厳密にいえば、上司・部下の関係ではないため、この「指示・命令」は語用論的条件を満たしてはいない。しかしながら、優れた知識や技術・技能を持ち、しかも女性二人よりも年上のスーパーハケンのこのセリフは「指示・命令」として機能しているとみてよいだろう。このスーパーハケンはいわばカリスマ的存在であり、そこには、有無を言わせない威厳がある。しかも、このスーパーハケンは窮地に陥った二人の派遣女性を救い出して、正社員たちに向かって「死ぬほど嫌な目に遭った次の日も、ハケンが笑顔で出勤するのは、生きるためです(p. 90)」「生きるために、泣きたくても笑っているんです(p. 91)」と、派遣の立場・思いを毅然と話す。ここには、『妻、小学生になる。』の「トップオブ、頼り甲斐」のある母親と重なるイメージがあるといえよう。しかしながら、ここで使用される「～シナサイ」は、「スーパー〇〇」といったカリスマ性を引き立てるための要素が高く、現実社会において女性は使いづらいだろう。

これに対して、同じ女性でも、派遣先の人事部の女性課長が、男性正社員によるセクハラを告発したこの二人の派遣社員の尋問で、恐怖のためにトイレに立てこもった派遣社員に対して「出てきなさい！何分かかってるの！(p. 87)」「何言ってるの！急ぎなさい！(p. 87)」と「指示・命令」を出すときは、全く逆の印象をもたらす。この「指示・命令」は女性課長の職務権限を前面に出した「威圧」的なものであり、しかもそこに怒りなどの感情が加わると、聞き手は状況からいって、さらに恐怖心を募らせることになるだろう。「頼り甲斐」のある人物像とは全く逆の人物像という効果をもたらすのである。

8. 言語資源の性差

これまで、脚本の中から主に女性の「指示・命令」表現を抽出し、男性のそれと比較しながら、その使用によってメッセージ内容ばかりではなく、話し手がどのような人物像（イメージ）を人々に発信し、聞き手にもどのような印象や効果をもたらすのかについても見てきた。このような表現と人物像は一体化して言語資源化の循環の中にあるといえよう。しかしながら、言語資源といってもそこには男性と女性という性差が見られるのかという問題があり、脚本中で使われた上司としての「指示・命令」表現を男女別にみると、そこには男女共に使われている表現と男女差がある表現とがあることがわかる。

8.1　男女で共通して使用される「指示・命令」表現

そこではじめに、職場で男女に共通して使用されている「指示・命令」表現を見ると、「～シテクダサイ」が目を引く。この表現は「～シナサイ」という命令形の部分に授受形式を組み込むことで、話し手に聞き手が恩恵を与えるという「依頼」的な行為を命令する表現である。先にみたように、男性上司では「責任持ってやって下さい！(『わたし、定時で帰ります。』(p. 23)」、「進めてください（『妻、小学生になる。』(p. 52)）」など、また女性上司では、「このパンフレットを翻訳して下さい（『わたし、定時で帰ります。』(p. 15)）」、「昼シフトの皆さん。あがってください（『その女、ジルバ』(p. 107)）」などである。そして依頼の遂行動詞、「お願いします」も男女共に使われているのである。「指示・命令」での「依頼」よりの表現と、女性（上司に限定していない）の職場の仕事場面での自然会話を分析して、他の語彙や関係も男性と共通して

いる部分が多いとの指摘（高崎　2011）とは、見合っているといえよう。

こうした男女で共通して使用される「指示・命令」表現を可能にしているのは、「～シテクダサイ」が形式としては命令形をとりつつ、発話内効力は「依頼」よりに調整できるという言語構造上の性質が、配慮を表したい話し手の意図と一致しやすい点にあるとみられる。こうして、言語構造上の性質と聞き手に対して配慮を示す余裕と穏やかさを持った人物像を一体化させることで、男女が共通して使用できる定型化された上司の「役割語」という言語資源になっていると考えられる。

以上の「～シテクダサイ」と並んで、男女共に「指示・命令」表現の多用なバリエーションを使用している点にも触れておきたい。字義通りの意味では「勧誘・提案」や「陳述」に分類される表現が、「指示・命令」表現のバリエーションとして使われているが、これは聞き手のフェイスリスク（Brown&Levinson　1978）を脅かすことを回避するためである。そして、このバリエーションが会話の過程で使用されている点に注目する必要があるだろう。これらのバリエーションは、先の表 1 にみられるように「指示・命令」の強弱を表しており、話し手が会話の過程のある状況に対応して、発話内効力の強弱を表す表現を選択しているからである。例えば、『わたし、定時で帰ります。』の中で、何時まで仕事をやればよいのか、という新人の質問に対して、教育担当者が「終わるまでやりましょう。頑張りましょう（勧誘・提案）（p. 18）」、また新人の雑な仕事ぶりに対して「見る人のことを考えて、相手の立場に立って考えるのが仕事の基本です（陳述）（p. 22）」などのセリフがあげられる。このように、バリエーションは会話過程におけるある状況の変化に対応して、話し手がその表現が「指示・命令」の強弱を適切に表すと思って使っているのである。泉子・メイナード（2017）は、この状況の変化に対応した表現の選択を「自己コンテクスト化」と呼び、話し手を聞き手との関係性の中で変化しつつある「複合体」として捉えている。

この「勧誘・提案」や「陳述」のセリフには、それを使用する主体や対象者が明示されているわけではない。特に、「陳述」は事柄を客観的に延べるという性質から、それを述べる話し手の利益と負担の構造を後景化しやすい。しかしながら、話し手はこのことを明確かどうかはともかく知っており、同時に聞き手も知っているからこそ、そこに「指示・命令」という語用論的意味が了解されると考えられよう。すなわち、聞き手もまたその表現を聞き手とは違った立場で「自己コンテクスト化」を行う「複合体」なのである。そして、こうした「複合体」が言語上で成立するのは、話し手、聞き手双方に共通する言語資源があるからだといってよいだろう。

8.2　男女間で使用差が見られる「指示・命令」表現

しかしながらその一方で、男女間で使用上の差が見られる「指示・命令」表現があり、脚本中では「～シナサイ」「～シロ」がその典型として使われている。これらの表現は「命令形」を使用しており、「指示・命令」を字義どおりに表す表現である。

8.2.1「～シナサイ」

女性上司による「～シナサイ」は、警察組織や企業のような公私の区別が明確である職場ではあまり使われていない。その中では、次の例は目を引く。女性参事官が「私を逮捕しなさい（『緊急取調室』（p. 75）」というセリフや、新人教育担当者が「私の言うことが聞けないなら好きにしなさい（『わたし、定時で帰ります。』（p. 23））」と言うセリフ、また女性人事課長の派遣女性に対する「出てきなさい！（『ハケンの品格』（p. 87））」と言うセリフである。これらの表現は、そこに女性参事官の矜持や、教育担当者、女性人事課長のイラ立ちなどが表されているだけでなく、聞き手に「上から目線」の威圧的な態度という印象を与えて反感や恐怖を抱かせることもあるだろう。

もちろん、「～シナサイ」の全てが、そうした「上から目線」を表しているわけではない。スーパーハケンの「無駄口叩かないで仕事しなさい（『ハケンの品格』(p. 80)）」には、カリスマ性ゆえの頼もしさが表れていたり、「お」がついているものの、バーのママの「お作りなさい（『その女、ジルバ』(p. 109)」からは、長年その世界で生きてきた貫禄と温かさを感じさせる。しかしながら、これは、カリスマ性やバーのママの貫禄をキャラ立てるための「役割語」として機能しており、一般的な女性は話し手として使用しにくい。

その一方で、私的領域における母親の「それだけは守りなさい（『妻、小学生になる。』(p. 20)）」というセリフには、「指示・命令」の強さを聞き手に感じさせるが、それは「頼り甲斐」をもとにしているとみられる。母親の立場での「～シナサイ」は実際によく使用され、女性にとって話し手の立場から言語資源となっているといえるだろう[2)]。

女性の「～シナサイ」表現は以上の「威圧」と「頼り甲斐」という二面性を持つが、特に女性の場合、聞き手としてこの二面性を、母親をモデルにして認知していくと考えられる。しかしながら、女性は成長するにつれて、家庭という私的領域外の世界と接触し、「～シナサイ」表現の「指示・命令」の強さを表す面が聞き手の対面やメンツをつぶす危険性を学ぶことで、公的領域＝仕事の面では話し手の立場から使用を控えることになるのではないかと思われる。すなわち、聞き手の立場で言語資源として有していても、職場では話し手としては、使用しにくいのである。そして、これに代わって、職場では、「～オネガイ（依頼の遂行動詞）」、特に敬体を使わない場面では、「～シテ（て形止め）」等を多用し、それらの表現が定型化された「役割語」となっていくと考えられる。もちろん、これらの表現は女性だけでなく、男性も使うこともあるだろう。

男性の場合でも「～シナサイ」の二面性は母親を通じて認知していると考えられる。しかしながら『緊急取調室』の副総監の「マスコミの方は君が責任をもって抑えなさい(p. 59)」「公の席は控えなさい(p. 69)」のセリフにみられるように、男性の場合、上司の言語資源としても使われている。ここでは副総監という地位の優位性、優越性を誇示し、そのことで聞き手の意に反しても自己の意思を貫徹させる姿勢が見られる。しかしながら、威圧的ではあるかもしれないが、男性の場合、感情的な印象は必ずしも受けない。それは、次項で述べるように、男性の場合「～シロ」という命令形の使用と関係があるからだと思われる。

8.2.2　「～シロ」

そこで、命令形の基本形である「～シロ」をみると、本稿で取り上げた脚本中、女性上司で 1 例、男性上司でいくつかの例があげられる。

女性上司の例では、先にも見た『その女、ジルバ』の物流センターチームリーダーの「いいから来いよっ！部長、笛吹新！以下同文！(p. 123)」のセリフである。このセリフはト書きに「スケバンのごとく(p. 123)」とあるように、この女性上司のキャラを出すための「役割語」であろう。この場合を含めて、わずか 1 例にすぎない。（ただし、「以下同文」と言われたもう一人の女性がむっとして「名前言えよ（p. 123)」と内心でつぶやくような例は数例あるが、発話としてはこの 1 例だけである。）

しかしながら、男性上司の例は多い。例えば、『緊急取調室』で刑事部長が女性参事官の起こした事件の真相を知らされ、どうすべきかの判断を迫られたとき「絶対に立件しろ（p. 70)」と言うセリフや、『ハケンの品格』の男性部長が「もっと豪華でハッタリ効いた接待にしろ（p. 79)」「それじゃ、スーパーハケンさんとやら、もう一杯お代わりくれ（p. 79)」「どんどん飛ばせ！(p. 88)」などである。また、『わたし、定時で帰ります。』の中で、新人の教育係となった二人の女性たちの新人時代の回想シーンでは、上司に「空気読め、三谷！(p. 22)」など怒鳴られている場面が出てくる。すなわち、男性上司の場合、「～シロ」表現が常態化・定型化された「役割語」となっていることを示している。

女性上司の「～シナサイ」が威圧的・感情的といった印象を与えやすく、実際は使いにくいのに対し、男性上司の「～シロ」は必ずしも感情的で威圧的な印象だけをもたらすものでもない。「～シロ」は頼もしい男性上司を表すこともできる。これは、組織自体が男性の仲間内関係の延長的色彩が濃い場合、仲間内コトバとしての「～シロ」使用が認められるためだと考えられる。これと同様のことは、女性の仲間内関係の延長としてみることのできるような職場でも見られる。『この女、ジルバ』でも見てきたように、「オ～シナサイ」「オ～連用形」のような字義通りの命令形の使用は、いやな印象を与えることなく、ママや先輩ホステスとしての風格さえ表す言葉遣いとして描かれている。

以上のように、命令形の「～シロ」使用には男女間で差が見られ、そのことは話し手にとって言語資源化に男女間の差があることを示している。

9. 結び

以上、5つのテレビドラマの脚本の中から、女性上司の立場での「指示・命令」表現を男性上司のそれをも参照しながら考察してきた。

その中で、「指示・命令」を表す「～シナサイ」「～シロ」の使用において、聞き手の女性たちは、話し手の女性上司の職務上の優位性だけでなく、その上司の個人としての資質、すなわち仕事上での知識や技術、技能の優秀さや、また励ましや助言、困難な状況から救い出してくれる母親のような包容力とを備えているかという人物像から、その表現を受け入れるか逆に反感を持つ点が注目される。つまり、その表現を暗に地位や権限に付着した「役割語」としてではなく、話し手の人物像を表す表現として理解しているのである。そのことはまた、聞き手の人格と話し手の言語表現とが密接に結びついていることを示す。『ハケンの品格』の一人の女性派遣社員が「大前春子さん（筆者注：スーパーハケンのこと）は私の人生にものすごいインパクトを与えた。そしてとても大切なことを私に教えてくれた(p. 76)」とか、『その女、ジルバ』の主人公の「こんなことではびくともしないよ。ジルバ。私はあなたとあの店を知って… (p. 90)」のセリフに表れている。

しかしながら、女性たちがこれら表現を言語資源化したとしても、話し手としてはその基準がかえって高いハードルとなって使えないのではなかろうか。それゆえ、「～シナサイ」を使用せざるを得ない場合、ごく事務的に使うか、さもなければ、その使用を避けて他の表現を使うほかないのであろう。すなわち、女性上司にとって「～シナサイ」は言語資源としては不安定にならざるを得ないのである。

男性の場合は、「～シナサイ」「～シロ」は、上司の人格から切り離された地位や権限を前面に出すことで繰り返し使用されている。そして、それは聞き手の男性部下たちにとっても正当性をもって受け入れられており、地位や権限に付着する定型化された「役割語」となっているのである。これは、新卒一括採用で終身雇用という職場が一般的で、それゆえ職場が仲間内の延長という色彩が強かった時代の影響ともいえる。もちろん、脚本中にもそのことに違和感を持つ男性も登場しているが、「部下が年上でも、ちゃんと管理しないと　『妻、小学生になる。』 (p. 52)」というヒラ男性社員と同様の男性も多く、「～シナサイ」「～シロ」は、聞き手、話し手ともに言語資源として定着しているのである。

このような人物像と結びついた言語使用の描写が視聴者の言語資源にどれほどの影響を与えているのかはわからないが、以上のことを気づかせてくれる女性ライター達によるテレビドラマが放送されていることは注目すべきであろう。

注）

1)小田（2021）のいうように、現代日本語では命令形「～シナサイ」は尊敬語としては使うことはできないが、命令形の基本形である「～シロ」よりは、言語形式上丁寧な表現となる。
2）学校の教員、とりわけ低学年を対象とした教員においても「～シナサイ」は、言語資源として機能していると考えられる。

参考文献・引用文献

1）大谷直輝・中山俊秀（2020）「認知言語学と談話機能言語学」中山俊英・大谷直輝編『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点』ひつじ書房，27-48.
2）小田勝（2021）「日本語の歴史的対照文法の成果と課題」野田尚史・小田勝編『日本語の歴史的対照文法』和泉書院，3-20.
3）蒲谷宏･川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店
4）金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
5）泉子・K・メイナード（2017）『話者の言語哲学ー日本語文化を彩るバリエーションのキャラクターー』くろしお出版
6）Brown & Levinson(1978（1987））*Politeness：Some universals in language usage*. Cambridge: New York: Cambridge University Press.
7）高崎みどり（2011）「女性の働き方とことばの多様性」現代日本語研究会編『合本　女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房，213-239.
8）横倉真弥（2012）「授受形式によるポライトネス上の距離の質的転換ー贈与交換システムから見た人間関係の距離の維持と親近感表示の両立ー」『名古屋言語研究』 第6 号，81-94.
9）横倉真弥（2022）「配慮のための言語形式選択基準にみる男女差―自己と集団の関係性の捉え方を中心に―」『日本語とジェンダー』第20 号、１－12.
10）リーチ，G.N.（1987）『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳，紀伊国屋書店.
11）リーチ,G,N（2020）『ポライトネスの語用論』田中典子監訳、研究社.

資料出典

１）井上由美子（2019）「緊急取調室」第１話『月刊ドラマ』5 月号、50-75.
２）大島里美（2022）「妻、小学生になる。」第１・２・３話『月刊ドラマ』4 月号、14-67.
３）奥寺佐渡子（2019）「わたし、定時で帰ります。」第１話『月刊ドラマ』5 月号、8-30.
４）中園ミホ（2020）「ハケンの品格」第１話『月刊ドラマ』8 月号、72-93.
５）吉田紀子（2021）「その女、ジルバ」第１・２話『月刊ドラマ』8 月号、89-123.
６）東海テレビHP『その女、ジルバ』　https://www.tokai-tv.com/jitterbug/special/18.htm　（2023 年１月13 日最終閲覧）